

2023/6/12

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑫

『ヨハネの黙示録 3章 —ラオデキヤの教会（前半）—』

■真実な方

「また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。『アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。』（黙示録 3:14）

ラオデキヤという町は、金融を中心とする町で、織物業が盛んであり、有名な医学学校がありました。非常に豊かな町であり、豊かな教会です。

この町の教会に宛てて書かれた手紙には、イエス・キリストについて、「アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方」と形容されています。「アーメン」とは「その通りです」という意味で、「アーメンである方」とは、「イエス・キリストが言われることはその通りです。真実で間違いがありません」ということを言い表しているわけです。

「神の約束はことごとく、この方において「しかり」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。」（Ⅱコリント 1:20）

旧約聖書に書かれていた神の約束は、ことごとくイエス・キリストにおいて現実となりました。神は約束されたことを必ず守る方であることがここでも証しされています。私たちが「アーメン」と言うとき、その栄光をお受けになる方がイエス・キリストです。

また、「忠実で、真実な証人」とは、真実しか語らないということです。真実に対して、批判したり文句を言ったりすることはあり得ません。人間には、それを認めるか認めないかの選択しかないのです。つまり、神の言葉を批判するということはあり得ないのです。神のことばは、信仰の対象であって、理性の対象ではありません。納得する対象ではないのです。「たとえ納得できなくても、真実だから信じます」、これが私たち人間のとるべき態度です。あなたは、御言葉に対して、批判的な思いを抱くことはないでしょうか。

たとえば、御言葉を否定する代表的な意見に、「人間として生まれたイエスがなぜ神だと言えるのか」というものがあります。しかし、真実な方が、自らをキリストと言った以上、キリストなのです。真実な方は、真実しか語らないからです。神のことばに対して、私たち人間ができることは、信じるかつまづくかしかありません。

聖書のことばが「つまずきの石」と言われる所以は、理屈で考えてもわからないからです。なぜ 2000 年前にイエス・キリストが架かられた十字架で私たちの罪が赦されるのか、イエス・キリストが復活したなど、理屈で考えたら理解できません。そのため、信じない人々には、十字架のことばは愚かです。しかし、この愚かな言葉は、信じる者にとっては神の力となるのです。ここに神の知恵があります。神の知恵とは、私たちの賢さを愚かさにするものなのです。この理解不能なことは、私たちにとって、つまずきにしかありません。つまり、信じるしかないということです。神に対しては信仰しかない、だから、あえて「つまずき」なのです。このことがわかると幸いです。

■神に造られたものの根源である方

神に造られたものの根源である方とは、イエス・キリストのことです。

「神に造られたものの根源」とは、父なる神に造られた最初の方だという意味ではありません。エホバの証人などはそのように理解し、イエス・キリストは神に造られた最初の被造物であり、神と人間の間であって神ではないと言うのですが、それは誤りです。イエスはキリストであるという信仰に立つのであれば、キリストは神であり、被造物ではありません。ここで「神に造られたものの根源」と言われているのは、「造られたものの土台」という意味です。イエス・キリストという土台の上に人は造られているということです。

「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世紀 2:7)

神は土地のちりで人を形造り、そこに神のいのちを吹き込んで、人の土台となりました。その神のいのちが私たちを支え、生かしているということです。私たちの土台に神がおられるからこそ、私たちは神を知ることができるし、神を求めるのです。

イエス・キリストは神に造られた被造物ではないということを正しく理解するために、もう一度三位一体の神について、確認しておきましょう。

神は、父なる神と子なるキリストと聖霊の三位一体です。この表現によって、神という社長がいて、イエス・キリストはその部下であり、さらに実際に活動するのは聖霊であるというような上下関係をイメージされることが多いのですが、これは、私たちの人間的標準という肉の物差しによる理解であって、正しくありません。聖書というものは、聖書の言葉で理解しなければ、正しく理解することはできませんから、肉なる物差しは排除しなければならないのです。聖書の理解に、人の考えは必要ありません。

神に対して父と子という表現が使われたのは、父と子が一つであることを表しています。子という存在には父が不可欠であり、父という存在には子が不可欠です。それによって両者は一体だということを表しているのは、イエス様ご自身が次のように言われていることから明らかです。

「わたしと父とは一つです。」(ヨハネ 10:30)

つまり、完全に一体であり、切り離せない親密性を表す表現が、「父と子」なのです。ということは、子の栄光は父の栄光であり、父の栄光は子の栄光です。イエス様も次のように祈っておられます。

「イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて、言われた。「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。」
(ヨハネ 17:1)

そして、さらに聖霊は子の栄光を表すとも書いてあります。

「御霊はわたしの栄光を現します。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」(ヨハネ 16:14)

このように、神は唯一であり、唯一なる神だけがおられるのですが、そこには父と子と聖霊という区別があり、父と子と聖霊という区別はあるけれども、神の実態は一つです。これが三位一体です。イエス・キリストを「神に造られた者の根源」という呼ぶのは、すべてのものが神によって造られたからであり、イエス・キリストがすべてを造り、イエス・キリストによって誕生したことを表しているのです。聖書に、次のように書いてある通りです。

「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」
(コロサイ 1:15-17)

三位一体の神に上下関係はなく、それぞれ互いがいなければ存在できない一体の関係だということ。

■冷たくもなく熱くもない信仰

「わたしは、あなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。」

(黙示録 3:15-16)

ヨハネの黙示録は、それぞれの教会の特色に合わせて、ある時は受容し、ある時は忠告を与えています。ここでは「冷たくも熱くもない」と言って、どっちつかずであることがあなたたちの問題だと指摘しています。「どっちつかず」とは、芯があるわけではなく、あれもこれもなんでも選択できているということです。こういう生き方は問題だということです。

ラオデキヤは豊かな町で、多くのものが満ちあふれ、いろいろな選択ができました。今の私たちの世界も同じです。「冷たくも熱くもない」とは、いつもその選択で迷い、思い煩って生きているために、大切なものを見失っていると注意しているのです。

「神がそのようなものを吐き出す」とは、どんなに思い煩ったところで、どんな選択をしたところで、何も残らないということを教えています。聖書が「残る」と教えているのは、信仰と希望と愛だけです。クリスチャンであっても、見えるもので安心しようとして、何を得ようか思い悩むことが多々ありますが、それはいかにも中途半端な生き方です。本当に大切なものをしっかりと手にして蓄えるように、神は語っておられます。

「冷たいか、熱いかであってほしい」とは、現実を見つめよということです。それは、現実の自分を見つめることが、本当の意味で神を知る道となるからです。聖書を読むことは、良いことではありますが、自分の現実がどうなっているのかが見えない限り、本当の意味で神が見えてくることはありません。聖書の言葉による私たちの信仰の根拠は、自分を見つめたときに得られます。「冷たいか、熱いかであれ」とは、外に目を向けるのではなく、自分を見なさいということです。現実から目を離すなということです。

■私たちの現実

1. 日々罪を犯し、日々罪に責め立てられている

人の目には自分の罪を隠すことはできても、神の前に隠すことはできません。誰もが日々罪を犯し、罪責感を覚えて生きています。

2. 日々周りの目を恐れて生きている

自分が周りからどう思われているのか、誰もが気になります。

3. 日々死の恐怖に怯えている

誰も体調を崩すと不安になるのは、死の恐怖に怯えているからです。私たちは、潜在的に死にたくないという思いを持っているのです。

これらの現実を一言で表すなら、現実はあるあなたの行いや存在を否定しているということです。「あなたは存在する価値がない」と、否定される世界で私たちは生きているのです。そして、この現実をどうすることもできません。私たちは、どんなに頑張っても罪を犯してしまうし、人の目が気になるし、死ぬのは怖いものです。しかし、どうにもならないことを知っているのに、それをごまかして生きているのです。いろんなことをやってみては、自分は選択できるのだと思い込み、人に見える部分を着飾り、安心しようとしています。これが、熱くも冷たくもないどっちつかずの生き方です。このラオデキヤの人々の問題は、現代の私たちにもそのまま通じます。

もし私たちが、すべては無であるという本当の現実を見るなら、私たちに残された選択は一つしかありません。「神様、私を憐れんでください。助けてください。」と、祈ることです。これが信仰の原点、神との出会いです。ですから、神との出会いは、自分を見たときに見えるてくるというのです。自分を知り、どうすることもできない自分の闇を知り、それでも生きたいと願う時、初めてそこに神の光を見ることができます。自分の思いをこの世ではなく、神に向けるのです。それが信仰です。

つまり、神の恵みを知りたければ、聖書ではなく、あなた自身を見なければなりません。自分がどんなに苦しんでいるのかを受け入れると、神の恵みが見えるようになり、神は自分の罪を赦してくれる、助けてくれるという聖書のことばが信じられるようになるのです。納得して聖書を信じようとするのではなく、自分の現実に気づいて聖書を神のことばとして信じる、これが正しい信仰の在り方です。

「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。」

(ルカ 18:13-14)

取税人は、お金を持っています。しかし、自分の現実を見た時、罪に苦しむ自分に気づき、叫んだのです。その時、イエス様は「彼を義とする」と言われました。それが本当の信仰だと認めたということです。つまり、神が私たちに望んでおられる信仰とは、自分の現実と向き合うことです。そして、そのあなたを助けることができるのはイエス・キリストしかいないということなのです。

もし、あなたが海で溺れていたとしたら、その時、あなたにはどんな選択があるでしょうか。誰かが来て、「お金をあげよう。好きなだけ取りなさい。」と言われたら、お金を取るでしょうか。または、「あなたに知恵を授けよう。今から一緒に勉強しよう。」と言われたら、そうするでしょうか。そんなことはしません。溺れている人にとって、唯一の選択は、救いあげてもらふことです。投げられたロープにつかまるという選択しかありません。それが私たちの現状です。神に憐れみを乞うしかない状態なのです。これが私たちの信仰の原点です。これを通して、イエス・キリストとしっかりとむすびつくことができるのです。

人々は、自分が豊かになることやこの世で成功することで、神に愛されていると勘違いしていました。いろいろなものを選択し、自分には自由があると勘違いしていました。しかし、そうではなく、イエス様は私たちの目を覚まさせ、熱いか冷たいか自分の現実を見て、神に助けを求めるように導いておられるのです。それが、あなたの信仰の根拠です。

「私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまもなく、あなたの前で獣のようでした。しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりとつかまえられました。あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。天では、あなたのほかに、だれを待つことができます。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。」

(詩篇 73:21-25)

この詩篇はダビデの賛美です。ダビデの信仰は高く評されていますが、ここにダビデの信仰の原点を見ることができます。ダビデは王として力を持っていましたが、苦しみを覚えていました。ダビデは自分の現実を見て、愚かでわきまもなく、どうにもならない自分は獣と同じだと言っています。そのような現実の中を見ても、ダビデは生きたいと願い、あきら

めることができませんでした。このように、現実と向き合い、それでも私は助かりたい、なんとかしてほしいという思いを持つ勇気が、信仰の原動力なのです。

その結果、ダビデは絶望の中で光を見ました。神にしっかりとつかまれた自分を知り、神に引き上げられた様子が、ここには描かれています。これを信仰と言うのです。

この詩篇を通して、神のとの関係が築かれていく過程がわかります。私たちが闇の自分に気づき初めて、神と本当の関係を築くことができます。絶望の中で初めて真の希望を知ることができるのです。ですから、私たちに必要なのは絶望する勇気です。自分自身を見て絶望する時、私たちの土台であるイエス・キリストの光が見えてくるのです。普段私たちは闇の中にいるのでイエス・キリストは見えません。闇の世界には、たくさんのまやかしの光が輝いています。しかし、この世のネオンライトがすべて消えて闇の中に落とされたら、イエス・キリストの光が見えてくるのです。闇はこれに打ち勝つことはできません。信仰はそこから沸き起こってきます。

このような私たちのどうにもならない状態を、パウロは「弱さ」と表現し、弱さのうちにこそ神の恵みが働くと言いました。自分の弱さを知ることが神を知ることです。そうすれば、神の恵みが本当に見えるようになります。

あなたの信仰の根拠はどこにあるのでしょうか。私たちは、ただイエス様が素晴らしいから信じているのではありません。それしか選択がないからです。私たちは死ぬべきものであり、私たちにいのちを与えてくれるのは、イエス・キリストしかないからです。そのことに気づいたから、イエス様から目を離すことができないし、それ以外に希望をもって生きることができなくなったのです。